

多良間島探究

沖縄総合事務局土地改良総合事務所長 高居和弘

1. はじめに

沖縄県宮古諸島の一つ「多良間島」においては、平成24年度予算概算決定により国営土地改良事業地区調査に着手することになりました。

この機会に、土地改良測量設計技術協会の会員の皆さまに、「多良間島」に関心を持って頂くため、多良間島の自然・歴史・文化をご紹介します。

2. 多良間村の紹介

沖縄県は、東京より約1,600km南西の位置にあり、東端に北大東島、最西端に与那国島、最南端に波照間島、北端に伊平屋島を有する、東西約1,000km、南北約400kmの広大な海域に、有人離島49島が散在しています。

多良間村は、宮古島（沖縄本島より約300km）と石垣島のほぼ中間（東経124度42分、北緯24度39分）に位置する、面積19.39km²の「じゃがいも」の形をした「多良間島」（宮古島より約70km）と、その北西約8kmにある面積2.153km²

の「さつまいも」の形をした「水納島」の2つの島からなります。多良間島は、琉球王国が中継貿易で栄えた中世には、沖縄本島と宮古、八重山地域を結ぶ航海上の要所でした。

多良間島へのアクセスは、那覇空港より約50分の宮古空港を経由して、多良間空港へ1日2往復、所要時間は約20分です。

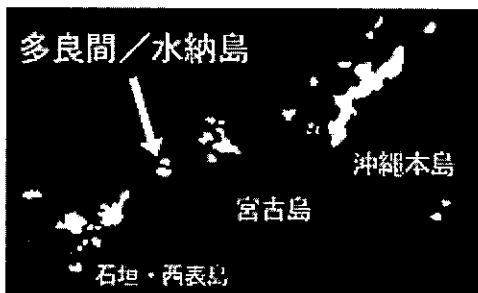
人口は、1,273人（男681人、女592人）、世帯数は、527世帯です〔平成24年2月末現在〕。

多良間村の基幹産業は農業でさとうきびを中心に野菜、葉たばこ等の農作物が栽培されています。また近年は、肉用牛や山羊を中心に畜産業も盛んに行われ、現在4,000頭余の肉用牛（主に子牛；生後12カ月未満）が飼育されています。

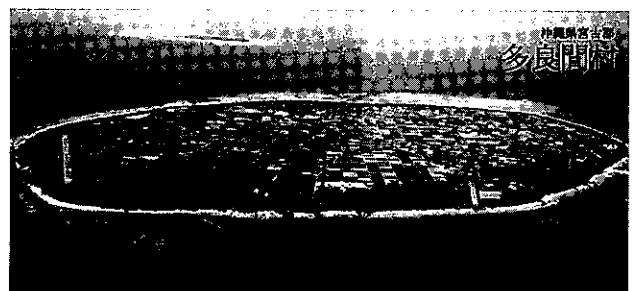
3. 「日本で最も美しい村」連合に加盟

島の豊かな自然と伝統文化の素晴らしさが評価された多良間島は、平成22年に「日本で最も美しい村」連合への加盟が承認され、全国で39番目の加盟となっています。

◇「日本で最も美しい村」連合とは、小さくても輝く



【多良間村提供写真】



【多良間村提供写真】

オンリーワンを持つ農山村が自らの町や村に誇りを持って自立し、将来にわたって美しい地域であり続けるために活動しているNPO法人。

下地昌明村長からは、「多良間村には、さまざまの世代の観光客がリピーターとなって来ていただいている。島の人間にはわからない多様な魅力を感じてくれているように思う。」というお話を伺いました。

多良間村の「未来に残したい村の特徴」としては、①生活に根ざした風水村落、②多良間の豊年祭が紹介されており、この二点を中心に少し踏み込んでみたいと思います。

4. 多良間村の特徴

多良間村には、国指定の文化財が2件あります。一つは、昭和51年に重要無形民俗文化財に指定された「多良間の豊年祭」、もう一つは、平成19年に史跡名勝天然記念物に指定された「先島諸島火番盛」であります。

◇先島諸島火番盛とは、先島地方に点在する琉球王府時代の「のろし」を利用した通信所跡18カ所の総称で、「遠見台」「火番盛」などと呼ばれ、日本の鎖国に伴い、外国船の侵入を防ぐための海上交通の監視・通報機能を担っていた。多良間村には、「八重山遠見台」「宮古遠見台」「水納遠見台」の3カ所点在する。

(1) 琉球風水的景観

多良間島の風景を象徴するキーワードには、「ウタキ(御嶽)」「フクギ群落」「抱護林」「植物群落」「遠

見台」「カー(湧水)」など、本州では馴染みのない言葉が多くあります。これらのキーワードは村のあちこちで見ることができます。

多良間空港から島の北側に向かうと、集落がいくつか所に集中しています。集落に入る手前(南側)に、東西に集落を取り囲む林帯(村抱護)が見えます。集落の西側には、島の英雄土原豊見親の生誕地である土原ウガムの植物群落があり、その最も高いところに八重山遠見台(島内最高海拔32.2m)があります。集落の北側には、森の丘があり、腰当森(くさてむい)と呼ばれています。集落の東側には、塩川御嶽があり、それぞれの御嶽の近くには湧水(カー)があります。

多良間島の集落の抱護林は、琉球王国時代に三司官(最高の行政ポスト)の「蔡温」が、1742年宮古平良頭の白川氏恵通に命じて造成させたという歴史的記録が残っています。

多良間島の抱護林は、屋敷抱護、村抱護、浜抱護の三つの要素で形成されており、村落や畑の防風、防潮、防火、土砂流出防止、適度の温度湿度保持など多くの役割を担い、現在もその効果を発揮しております。

琉球型の風水集落としては、県内唯一の集落景観であり、貴重な文化遺産とされています。

また、住民の信仰のよりどころとなっている拝所(御嶽・神社)を取り巻く植物群落は、天然記



八重山遠見台よりの眺望【筆者撮影】

念物として文化財指定され、その中にある樹齢200年を超えるフクギやアカギの大木10樹木は、「おきなわの名木百選」の認定を受けております。

平成23年3月、これらの文化遺産や景観を包含する形で「多良間県立自然公園」として、沖縄県内で4番目の指定を受けました。多良間の自然が高く評価された結果であり、多良間の自然を体感して、はじめて多良間村のことを考えられるのではないかと考えています。

(2) 多良間の豊年祭

次に、多良間村独特の年中行事や祭事を見てみましょう。

○旧暦1月2日「ウイヌウダミ」

仕事始めに当たり一年間の豊作（豊魚）と健康・安全を祈願する。

○旧暦2月の^{かのえうま}庚午の日「ヤマドミ」

十日間山への出入りを禁止し（山止め）、伐採禁止を告知する。主目的は森林保護だと言われている。

○旧暦2月^{ひのえうま}丙午、^{ひのえう}丙卯、^{ひのえね}丙子の3回にわたる「ウツブリ」

害虫除けの行事で、農民や牛馬の謹慎の日。

○旧暦3月の^{きのえ}甲、または^{つちのえ}戊の日「ムギプーリ」

麦の祭りで結願。

○旧暦4月の^{きのえ}甲、または^{つちのえ}戊の日「アープーリ」

粟の初穂祭りで結願。

○旧暦5、6月中の^{みづのえたつ}壬辰の日「スツウプナカ」

粟の収穫を終えて作物の実りの神への感謝と次に始まる生産の豊かさを祈る大祭。島の二大祭りの一つ。（「スツ」は節、「ウプナカ」は祝）

○旧暦6月「クムリウガム」

一年の豊作に感謝するとともに、来年への祈願を行う。

○立秋の日「アキバライ」

外部からの疫病や悪霊を祓う、厄祓いの行事。

○旧暦8月の^{みづのえ}壬から十日間「ヤマドミ」

旧暦2月同様の行事。

○旧暦8月8日、9日、10日の三日間「八月踊り（八月御願）（豊年祭）」

一年間の五穀豊穰への感謝祭。

◇初日、字仲筋は、運城御嶽、泊御嶽、多良間神社の三御嶽に、字塩川は、塩川御嶽、普天間御嶽、峯間御嶽の三御嶽にそれぞれ拝み、その後、字仲筋は土原御願で、字塩川はピトマタ御願で、各御嶽に「さけ・さかな」が準備され、敬虔な感謝祭が行われる。それが済むと、両踊り場で、数多くの芸能が披露・奉納される。

○旧暦9月「ウガンプトキ」

島内の各御嶽、全ての拝所で豊作を感謝する、御嶽解きの行事。トゥブリ（海岸の出入口）の小道の清掃も行う。

○旧暦9月のウガンプトキから九日目「マツター」

酒肴を火の神、仏壇、守護神にお供えする行事。竜宮の神が各畑に種蒔きをする日といわれているため、前日の午後から畑仕事は休む。

◇竜宮の神はトゥブリから来られるので、道を開くためウガンプトキに清掃が行われる。

○冬至の日「トゥンジー（冬至）」

「今年も残り少なくなりました」と一年の無事を感謝する行事。

このように、多良間島では数多くの行祭事が行われており、自然への感謝と幸福な生活を願うことが、日々の生活の中に溶け込んでいるように感じられます。

(3) 多良間村史

多良間村の自然・歴史・文化を知る上で、「多良間村史」は貴重な資産であります。多良間村史編集委員会は、昭和59年から「多良間村史」編集に手がけ、平成17年に、通史編と資料編5巻

で全6巻が完成しました。

通史編は「島のあゆみ」、資料編は「王国時代の記録」「近現代の社会と生活」「民俗」「芸能」「多良間の系図家譜並びに護書・古文書・御嶽・古謡」とタイトルが示しているように、多良間村には古文書・史料類が多く残されており、島人が守り伝えてきた「たまもの」と考えられます。多良間村を深く知るには、きわめて貴重な資産であり、多くの方々の目に触れることを期待するところがあります。

5. 宮古八重山諸島での自然災害

自然・歴史・文化を知るうえで、自然の営みにより多良間島が受けた災害についても、紹介しておく必要があります。

(1) 八重山地震津波

1771（明和8、乾隆36）年4月24日（旧暦3月10日）の午前8時頃、石垣島白保南南東40kmを震源とするM7.4の地震に伴い、宮古・八重山諸島を襲う巨大津波が発生しました。この津波は、「八重山地震津波」と命名されており、その遡上高は、石垣島で最大30m、多良間島で15m、宮古島で10mと推定され、犠牲者は約12,000名（多良間島3,324人の内362人溺死）にも及んだと記録されています。

◇【理科年表】1771.4.24(明和8.3.11) 24.0° N 124.3° E M7.4 八重山・宮古両郡島：『八重山地震津波』：震害はなかつたようである。津波による被害が大きく、石垣島が特にひどかった。全体で家屋流出2千余、溺死約1万2千人（宮古諸島2,548人、八重山諸島9,313人）。

(2) 津波の影響と原因

さらに、この津波に伴い、宮古・八重山諸島の各島では、直径数mにも及ぶ多数の珊瑚礁や石灰岩の岩塊が打ち上げられており、それらの岩塊は古くから「津波石」として知られています。

地震の規模に比較して、津波の遡上高が大きいことから、津波の原因としては、大規模な海底地滑りが発生した可能性が高く、発生箇所としては、黒島海丘南側斜面の崩壊と併せて、多良間島南方沖での陥没がほぼ同時に励起されたとの見解が示されています。その他に、琉球海溝で発生した海溝型巨大地震（M8.0）であったとの可能性も示されており、今後の海溝探査に原因究明を期待するところです。

(3) 地形地質構造

津波が多良間島にどのような影響を及ぼすかを考える上で、多良間島の地形地質構造も、確認しておく必要があります。

土地分類基本調査（宮古地域、国土調査：沖縄県、1984）によれば、「島全体は、ほぼ均一に琉球石灰岩で厚く覆われており、この石灰岩は、碎屑性砂質-礫質石灰岩、石灰藻球石灰岩、サンゴ石灰岩などの岩相に区分、その岩相変化は、ほぼ水平に層理を示しており、各岩相が数m～十数mごとにくり返して互層している。このうち、サンゴ石灰岩は3～4層存在し、最も少ない割合を示している。下位の多良間砂層までの層厚は50～60mに達する。」と記載されています。

(4) 淡水レンズのメカニズム

多良間島の琉球石灰岩には、周囲の海水（塩水）が下層部に侵入しており、雨水が地盤中に浸透すると、塩水と淡水との密度差によって、塩水の上に浮かんだ状態となって溜まっており、この塩水の上に溜まった淡水は、島の中央に近いほど厚みがあり、海岸へ近づくにつれて薄くなるため、その形状から「淡水レンズ」と呼ばれています。

このように、今後、地震津波発生の可能性を想定していくと、津波に伴う海水が淡水レンズにどのような影響を及ぼすのか、歴史の中の自然現象

に、真摯に目を向けて具体的な検討も必要ではないかと考えています。

6. 製糖工場操業開始式

平成 24 年 1 月 15 日、多良間村の宮古製糖多良間工場（含蜜糖工場）において、2011-12 年産サトウキビの製糖操業が開始し、4 月 5 日までの 82 日間の操業を予定しています。

なお、沖縄では現在、含蜜糖工場 5 社 8 工場、分蜜糖工場 9 社 10 工場が操業しております。

◇「含蜜糖」はサトウキビの全成分をそのまま煮詰めたモノ、黒糖の他には和三盆など。これに対して「分蜜糖」は絞り汁から糖蜜を分離したモノで、白砂糖やグラニュー糖、三温糖など。

今年のサトウキビは、昨年春先に低温が続いたことや夏場の台風や干ばつなどの気象条件が大きく影響したことで搬入量は前年比約 5 千トン減の 1 万 8 千トンにとどまる見込みとなっており、このことが、例年より 1 ヶ月程度操業開始が遅くなった原因となっています。

宮古製糖社長は、「多良間の農家の皆さんが丹精込めて育ててくれた。日本一の品質の黒糖を製造し、皆さんの努力に応えたい」と決意を表し、下地昌明多良間村長は、「多良間村は黒糖産業なくしては成り立たない」と村の産業の中核であることを話されました。

筆者も、開始式に参加させて頂き、「平成 24 年度

より多良間島に貯まっている地下水（淡水レンズ）を効率的に利用する事業化に向けた調査を開始します。過去に発生した大津波なども想定した上で、多良間島の持続可能な農業生産体制を構築するための取り組みを行う」と決意表明をしました。

事業化に際しては、多良間村及び沖縄県から、「淡水レンズからの大規模取水技術の確立」「技術面・管理面での安全性の確保」を求められており、十分な原位置実験を行うなど高度な検討が必要な調査地区であります。

7. 最後に

このように、当事務所では、多良間村をはじめ、沖縄県全域を対象に、調査を実施しております。

我々の使命は、沖縄の自然条件を農業に活かし、地域の経済活動へ如何に波及させていくかであり、このことが重要であると認識しています。

土地改良事業はあくまでも手段であり、整備後に、地域の農産物が流通して、地域の経済活動が活性化出来るよう、地域づくりも視野に、必要な土地改良の事業化に向け、取り組んでいるところです。

会員の皆様方には、沖縄県の持つ様々な課題を十分把握した上で、課題解決に向け、お力添えをいただければ幸いです。



平成 24 年 1 月 15 日操業開始式＝宮古製糖多良間工場内【宮古新報提供写真】